

「一つゲームをしよう」その男は言った。年は四十ぐらいだろうか、チョッキの上からでもお腹が出ているのが分かる。「簡単だよ、俺が君の年齢を当てるだけさ。もし当たらなかつたら、金輪際君には話しかけない。けれど当たったら一緒に踊ってくれるかい？」

「いいわ、面白そう」サテン生地の高い青のドレスを着たケイトは片手を腰に当てながら言った。

「ふむ、そうだな」男は考えながら、テーブルの上で指を組み、両手の親指をクルクル回していた。

ホールの中心で男女が踊っている。燦然と光るシャンデリアは踊り手たちを照らす。まるで春の息吹のように曲調は新しさに満ち、この一瞬にすべてが生まれていた。

「二十歳だ。どうだい？」

「すごいわ！」ケイトは初々しく言った。

「年の功つてやつさ。さあ、踊ろうか。……君、舞踏会に来るのは初めてだろう」男はケイトの指と自分の指を絡ませながら曲調に沿って動かす。

「ええ、そうよ」ケイトは男の肩の後ろに手を回す。

「見すぎだ、人のことを。彼らは流れていく空気のようなものだ」男は体の軸をぐいとずらし、ケイトに目配せする。

《どうして皆、相手のことを見ないのかしら》むしろケイトはそう思ったが、男がすぐに話し始めたので、唇が形どった主張は言葉にならず、もれた吐息ばかりが新鮮なメロディに溶けていった。

「君はまだ若い。けれど悲しいかな、君のその白く柔らかい腕は、ずんぐり太った醜いものになり、その端正な腰はいつか壊れて、君は二階席に座ってダンスを眺めるだけになる。ほら、あそこにいる年取った夫人たちのように。そうして若者を見て昔はあのぐらい踊れたのよ、

と言うようになるのがオチさ」

男はケイトを引き寄せたかと思うと、急に離し、繋がっている手を高く上げケイトを回した。世界は崩れるように回り、ケイトは急降下した気分になった。

《私はあらゆることの始まりにいたんだわ。この男がゲームだなんて言わなければ》

弦楽器が音を外し不快なつんざく音が響く。ケイトは男の腕に寄りかかり背を仰げ反らせる。シャンデリアが悲しげに光る。

《幸せはどうして永遠に続かないのだろう。いや……永遠ですら短いのに！》

男がケイトを引き寄せて乱暴に回る。背景は無理やり引き延ばされたみたいに流れていく。踊りは終わった。魔法は解けた。

次に、若いタキシードを来た男がケイトに手を差し出した時、彼女は慣れた、諦めたような顔で笑いかけた。そして、もう男の顔を記憶に留めることはなかった――